

明治大学教養論集 通巻356号
(2002・3) pp. 53—66

「自伝」と「自伝的」

—自伝研究理論における「著者」の問題について

広 沢 絵里子

1. 自伝研究をとりまく諸問題

ある小説が「自伝的」である、と言ったとき、研究者や批評家はそれで何を述べたことになるだろうか。あるいは、ある作品を「自伝的小説」として扱うとき、評者はすでにどのような解釈の枠組みに入っているのだろうか。

また、誰かの「自伝」を読むとき、自伝の著者がみずからの人生について証言していることを、私たちは「真実」として受け止めるべきだろうか。本人以外に誰がその人生について本当のことを言えるだろう。しかし、実際には「自伝」と銘打たれたテキストを読むとき、テキストの著者よりも、読者である私たちの方が、より情報を持っていることもありうる¹。つまり「自伝」の著者は、語るべき真実を語っていないが、私たちは別の情報源から著者のうそを見抜ける、という主張も可能である。では、批評家が「自伝」を分析するとき、その「真実」と「うそ」を確定していくことを（ひとつの）目的に、または分析の前提にすべきなのだろうか。しかし他方、自伝の著者には、読者が確認したい「真実」を語る義務があるのだろうか。

文学や芸術作品の批評に携わっていて、この「自伝」や「自伝的」という概念にぶつからずに済ませることはほとんど難しいといってよい。それどころか、フィクションとみなされている作品が「自伝的である」と述べることは、多くの論文が好んで用いる結論でさえあった。しかし、過去30年ほど

の間に進展した文学理論および自伝ジャンルをめぐる理論的な議論は、「真実」か「虚構」か、を決定する議論の地平を、そもそも「真実」と「虚構」の境界を定めてきたものは何か、という別の地平へずらしてしまったように見える。真実への参照関係を持つ（と見なされる）「自伝」と、「自伝的」虚構作品との間にあった微妙な境界は、流動的になり、ほぼかき消されてしまった。

「[...] すべての文学作品は、たとえそれが無意識のうちにであっても、作品を読むそれぞれの社会によって『あらたに書きなおされる』のである²」といった文学観において、どのテキストが「自伝」であり、また「自伝的テキスト」かという決定も、テキストの内在的な条件だけでなく、テキストの周辺（歴史、文化、社会関係、読者層…）を考慮することなしにはできない。さらに、自伝における「私」は、「著者」・「テキストにおける語りの主体」・「テキストの中で物語られる客体」の一致を暗黙の前提にしてきたが、現代作家たちは、この三者が必ずしも一致し得ないという理論的仮定を実践的に利用しつつある。そうした新しい自伝作品が登場することで、「真実」や「事実」へ参照関係があるとみなされてきた「自伝」を、フィクションの一形態として捉えなおす動きに拍車がかかっている³。同時に、自伝（的）テキストは、「事実」と「フィクション」の複雑な関係を他の文学ジャンルよりも先鋭化させるため、自伝をめぐる議論は「文学的表象一般にかかわる問題領域」として注目されている⁴。

こうして、「自伝」をどう読み、解釈するか、また「自伝的」という概念と、どのようにつきあっていくか、という問題はやっかいな性格を帯びつつある。現在では広く浸透しつつある認識のひとつであるが、たとえば、作家が「自伝」において自分の著作について解釈を行っている場合でも、研究者がみずからの作品解釈を作家自身の証言によってオーソライズすることは難しくなっている。同時に、作家自身の証言を否定することも容易ではない。なぜなら、構造主義・ポスト構造主義以降の文学理論において、テキストの

意味を一義的に定める「著者」の地位が周辺化され、テキストの意味は「読者」側の読む行為を通じて生み出されるといわれながら、しかし、なお一方文学研究の実践において「著者」は資料の検索・収集、そして結局はテキスト解釈において文学的要素の一つであることをやめていないからである⁵。

自伝ジャンル研究は、たとえばドイツの場合には、19世紀末のディルタイの解釈学にさかのぼる伝統があり、その流れをくむゲオルク・ミッシュなどの研究者たちがゲーテの『詩と真実』を頂点とする「市民」文化のジャンルとしての「自伝」を規範化する一方、自伝ジャンルにおける他の西洋文学との相互的な影響関係も常に視野に入れてきた⁶。その広範な議論の中で、自伝の「著者」は、自伝ジャンルの定義をめぐる、当然のことながら中心的な役割を果たしてきた。なぜなら、「著者」の人物像なくして「自伝」・「自伝的テキスト」はありえないからである。本稿は次章以降において、この当然視されている問題を、「著者」に関する歴史的議論を振りかえりつつ検討する。

2. 「自伝」と「著者」

自伝の歴史を古代から19世紀にいたるまで記述した G・ミッシュの大著『自伝の歴史』は、1907年に刊行が始まり、著者の遺稿からの発表も含めて1960年代後半にいちおうの完結を見た⁷。ミッシュは、その序文において、多様な内容・形式を含みうる自伝ジャンルが他の文学ジャンルに比べて厳密には定義しにくいことを示唆した上で、自伝 (Autobiographie) を非常に緩やかな形で定義した。「それ〔自伝〕は、その名が示すこと以上に詳しくは定義できないと言って良い。つまり、ある個人の人生 (bios) の、その人自身 (auto) による描写 (graphie) である。」⁸

Autobiographie という語が、類似ないし競合する他のジャンル名称 (たとえば「告白 (Confessions/Bekenntnisse)」や「回想録 (Memoiren)」) に

比べて、特に「著者その人自身」にアクセントを置いていることは、ミッシュの次のような記述において明らかになる。Autobiographie という表現は「ある文献の文学的形式、あるいはその文献の文学 (schöne Literatur) に対する関係については何も語っていない。そうではなく、描き出される人生の主であるその人自身が作品の著者 (Autor) だ、ということに比重を置くのである。」⁹

ここで用いられている Autor (著者・作者) という概念は、作品の描いている人生と、その人生を生きた人物の一致を強調しているだけではない。自伝を書く者は、みずからの人生を「意味を内包したひとつの全体として (als ein Ganzes)」とらえている¹⁰。「それを強調しようとしまいと、彼 [自伝作者] 自身がみずからの体験の意義について知っているのである。自分の人生を統一的全体として理解することを可能にするこの知識は、彼の中に、人生の過程におけるさまざまな体験を通して形成されたのであって、一方、人々は他人の人生を、いつもおくらせながら、それが死によって、あるいはすでに歴史的なものになったかして完結したときに、ようやくひとつの全体として見るのできるのである。」¹¹つまり、ミッシュの Autor という概念は、テキストを通じて理解すべき対象 (「人生」) を定め、またその対象を解釈する前提 (「人生」は「ひとつの統一的全体」であり、著者自身がその意味をもっとも良く理解している) を作り出す上で、決定的な機能を果たしている。しかしながら、自伝研究において想定されるこのような「著者」のタイプは、普遍的なものなのだろうか？

ロラン・バルトが『著者の死』(1967/1968年) で、またミシェル・フーコーが『著者とは何か?』(1969年) で問題にしたように、文学テキストにおける「著者・作者」は、歴史的に見ると「近代の人物」であり¹²、著作権などの法的整備によって著者のテキストに対する所有権が確立しはじめる18世紀末から19世紀はじめに現れた存在である¹³。フーコーは、著者が匿名のまま流布してきた文学的テキストと、著者名なしでは受け入れられなかつ

た学術テキストとの関係が17世紀・18世紀頃から逆転したことを指摘している。つまり、この時代以降には、一般的に真理として証明可能な内容をもった学術テキストは著者なし・匿名でも流通するようになったが、文学テキストはその著者が誰であるかが問われるようになったのである¹⁴。上述のミッシェの例において明らかなように、「自伝 (Autobiographie)」というジャンル名称は「著者」概念と密接な関係がある。19世紀末以降、「回想録」その他の名称を徐々に押しのけて普及したこの名称は、今日までジャンル名称として最もよく用いられており¹⁵、「著者」というパラダイムがその大枠において現在まで生き延びていることを間接的に示している。

文学テキストをめぐるコミュニケーションの問題は、「著者」の出現以降、特に「著者」と「読者」とのコミュニケーションに関する問題として浮上してきた。ボリス・トマセフスキーは、バルトやフーコーに先駆けて、文学的要素としての「著者」が18世紀に生まれたことを指摘し、「読者」にとっての「著者」の意味を論じている (『文学と伝記』1923年)¹⁶。彼によれば、「読者」にとって、「著者」の「伝記」は作品を読む上で不要であった時代もあれば、不可欠な時代もある。言い換えるなら、読者が詩や小説を読むとき、著者については眼中にない時代もあれば、虚構作品のなかに著者の人物像を求め、著者の人生を詮索し、作中に著者の「自伝」を当然のように読み込む時代もある、ということである。この現象をふまえて、文学研究者は、著者の「伝記」とどう向き合えばよいのか。トマセフスキーの議論を要約すると、以下のようになる。

トマセフスキーは、ロシア・フォルマリズムの文学研究者・言語学者であるが、彼の『文学と伝記』における立場は、単純な伝記主義への回帰でもなく、また初期フォルマリズムのようなアンチ伝記主義でもない。彼は、「文化史」と「文学史」を区別し、文化史にとって文学の歴史的コンテキストは常に重要であること、したがって著者の「人物」も重要であるとした。一方、文学研究者にとって「著者」は (ヴォルテール、ルソー、プーシキンなど、

自分たちの人生を作品理解のための引き立て役として演出した作家たちの例に見られるように)「著者によって創られた彼の人生の伝説」が、作品の意味の部分として、作品の適切な理解に必要な前提となるときのみ重要になってくる¹⁷。その際、作家の自画像が正しいかどうかは問題ではなく、ある著者の伝記それ自体が、文学的事実の一部として機能している点に目を向けなくてはならない。ここでいう「伝記」とは、歴史文学の一ジャンルではなく、「芸術作品の伝統的付随現象」としての伝記なのである¹⁸。ちなみに、歴史文学としての「記録文学的伝記」であるならば、それは「文化史」に属するものであって、作家の伝記も、将軍や発明家の伝記もなんら違いはない。文学(史)研究にとって、そのような意味での「伝記」は、必要であるにしても、単に外的な「情報提供資料・補助資料」にすぎない¹⁹。

トマセフスキの議論をふまえて、作家自身による「自伝」の果たす役割を考えるならば、「自伝」は「著者」の人物像・人生・作品を総合的に演出するための効果的なメディアであり、読者を「著者の真実」という物語空間に導くテキストだといえるだろう。したがって、この「自伝」が、まさに「著者」という総合的なイメージ(伝記・伝説)を作り出す役割を担っているならば——つまり、著者の多様なテキストを総合的な「著作」に纏め上げ、断片的な人生の出来事を統一的な人生につくりあげるならば——なおさらのこと、「自伝」テキストを、作家の「著作」から独立した解説的テキストとして扱うのではなく、作家の「著作」の一部としてどのような役割を果たしているか、その機能・戦略に関して厳密に検討する必要がある。このような立場での分析・研究にとって、「自伝」に描かれた出来事が「真実」であるかどうかは、二義的な問題となるだろう。

これまで述べてきたことに鑑みて「著者」の存在を歴史的に捉えるならば、テキスト解釈にとって、また同時に「自伝」にとっての「著者」は、普遍的かつ不変の型を保っているわけではない、と考えるべきだろう。ミッシュの定式化した自伝の「著者」と、その「統一的人生」について言うならば、こ

の著者像は、自伝（的）テキストを解釈するために近代市民文化が生み出した「仮構」として捉え直される必要がある。1960年代にはすでに、現代の自伝作品の傾向として、「できあがった」自己像ではなく、「[変化の] 過程にある私」について描くことに強い関心が向けられるようになった、と指摘されている²⁰。市民社会に成立したアイデンティティーの理想型を反転させ、多様で錯綜した自己像の表現が模索されていたのである。自伝（的）テキストの解釈・研究における問題は、歴史的・文化的に規定されている「仮構」としての著者像が、その背景が問われないまま「真理」として機能してしまう時に生じていると言える。一定の「著者性・著者の地位（*Autorschaft*）」を暗黙のうちに承認し前提とすることで、その規範を逸脱していると見なされる自伝作者・自伝テキストが排除され、あるいは、様々な自伝作品の関係が上下・階層関係においてのみ捉えられたり、「統一的人生」というモデルを無批判に受容することで、自伝テキスト内部の矛盾、分断、亀裂を無視する解釈パターンが生じたりする。近代市民社会に成立した主体モデルを基盤とした「著者」が規範となっている場合、たとえば公共空間への参加が男性とは違った形で制限されていた女性は、「著者性」そのものへの接近が阻まれており、その結果、女性作家には古典的な意味合いでの「自伝」を書くことも難しかった²¹。文学史記述の見地から言えば、自伝ジャンル研究において、女性たちが残した（伝統的・規範的自伝とは異なる）自伝的テキストを研究対象としてとりあげるためには、著者の地位を巡る歴史的考察が不可欠だったのである²²。

「著者」の歴史的類型学から言えば、「統一的人生を持った著者」は、「著者」の一典型として捉えるべきであって、これをすべての自伝（的）テキストに対して普遍化・規範化してしまうことはできない。歴史的に伝承されてきた自伝（的）テキストのすべてが、典型的な「著者の地位」を有した著者によって書かれているわけではないのである。

3. 「自伝」と「自伝的」——「自伝」ジャンルの定義をめぐって

時代や文学潮流の違いによって「伝記を持つ作家」と「伝記を持たない作家」²³があり、また「伝記を持つ作家」にも様々な類型があることを示したトマセフスキの議論は、半世紀の間においてフーコーが論じた「著者機能」および「著者の歴史的類型学」の問題を先取りしたと言われている。フーコーは、「著者機能」を持つディスクールと持たないディスクールの差異に注目しながら、「著者機能」を見分ける四つの指標を挙げている²⁴。「著者」の機能は、まず(1)テキストの法的な所有関係を明らかにするものであるが、(2)歴史や文化によって、すべてのディスクールに対し常に同じように働いているわけではない。すでに上で触れたように、ヨーロッパの歴史においては、匿名で流通してきた文学テキストが17・18世紀頃から著者名なしでは受容されなくなってきた。

本論との関連で重要なのは、第三と第四の指標である。(3)「著者」という人間像(「理性的存在」)を生み出す複雑な操作の結果としての「著者機能」。人は「著者」という個人にリアリティを与え、創造の源泉をその個人の中に見出そうとするが、この行為は、実際には、テキストをどのように評価するかという、テキストを取り扱う方法の「心理学的投影」に過ぎない²⁵。哲学者や詩人など、時代およびディスクールのタイプによって、異なったタイプの著者が形成されるものの、「著者」がテキスト解釈・評価において果たす役割にはおよそその共通点が見られる。つまり、「著者」を通じて作中の出来事を説明することができ、また、作品の水準、使用される概念、文体に統一性を与え、一連のテキストに存在しうる様々な解釈上の矛盾を消去することができるのである。(4)番目の指標としてフーコーは、「著者機能」を持ったディスクールにおける、語り手の「私」の分裂について述べている。たとえば、小説における人称代名詞(一人称)、および時・場所を示す修飾語は、

小説家その人を厳密に指すことは決してない。指示されるのは「第二の自我(alter ego)」であり、また、この自我の、作家への隔たりは同じ作中であっても様々に変化しうる。「著者という機能は、まさにこの断絶——この分離と隔たりにおいて作用するのである。」²⁶ また、この「自我の複数性」は、文学テキストだけでなく、「著者機能」を持つすべてのディスコースにあてはまる。

指標(3)は、あるテキスト群を矛盾のない統一体に纏め上げる機能としての「著者」に注目しているのだが、テキスト同士の間にあるすべての差異は、「発展、成熟あるいは影響」によって減少させられる、という²⁷。つまり「著者」は、人生のメタファーによって各テキストの関係に整合性を与えている、と言えるだろう。この意味で、「著者」原理によって収集される各テキストは、それぞれ「著者」のなんらかの伝記的要素との関連から解釈されていると考えられる。「著者機能」を持つテキストは従って、極言すれば、すべてが著者の自伝的要素を含んだものとして読まれる可能性がある。一方、指標(4)は、「著者機能」を持つディスコースにおける一人称の語り手「私」には、複数のレベルが同時に存在しており、テキスト内部の「私」を作家その人に完全に還元してしまうことは不可能であることを示している。しかしこの問題は、フィクションとしての文学テキスト内部の「私」に、作家の自伝を読み取る可能性を常に残しているし、同時に、「自伝」テキストの「私」を一元的に作者と同一視することの不可能性も示唆している。

「著者」の問題をこのように考察すると、いわゆる「自伝」と「自伝的テキスト」の関係が互いに表裏一体となっており、常に相互に入れ替わる可能性を含んでいることが想像できる。結論から言えば、「自伝」を様々なタイプの「自伝的テキスト」(日記、手紙、自伝的小説など)から厳密に切り離し、純粋なひとつの文学ジャンルとして定義することは難しい。また、すべての自伝的テキストを視野に入れ、自伝的ジャンル全体を定義しようとしても、形式面ですでにあらゆる可能性が考慮されなくてはならず、定義づけは

およそ不可能である。様々な自伝的テキストのタイプを歴史的に考察し、ある程度の類型を見定めた上で、自伝ジャンルの多様な可能性を記述していくほうが、定義づけに拘泥するよりも生産的であろう。

ただ、「著者機能」を通じて「自伝」の定義に関して明らかになる局面が二点ある。まずひとつは、あるテキストが「自伝(的)」であるかどうかは、テキストに内在する条件だけでは決定できない、ということである。テキスト内部の「私」を作家本人であると断定することが実質的に不可能ならば、語り手の「私」と作家自身の一致を保証するメカニズムが、テキストの外的条件として備わっていなければならない。もう一点は、読者は「自伝」を読むことで、著者の「人物」と関わるようなイメージを描くが、実際には「テキスト」に関わっている、ということだ。著者という「人物」が「自伝」というテキストを生み出している、というイメージ(あるいは錯覚?)は、実際には、テキストが著者という「人物」を生み出すという、逆転した関係によって支えられていることが分かる。

この二つの問題は、たとえば、フィリップ・ルジュンヌやポール・ド・マンの自伝ジャンル定義をめぐる議論においてもはっきりと刻印されている。ルジュンヌは、自伝を形式面からも厳密に定義しようとする方向を取りながら、結局、自伝が「自伝」として成り立つのは、自伝作品の「著者・作品内部の語り手・語りの対象となる主人公」が同一であることを示すレトリックがテキスト内部に存在し、また読者がその三者の同一性を認める「契約」に合意した場合だ、と考えている²⁸。ルジュンヌの「自伝契約」という概念は、自伝を定義する決定的要因がテキストの外部に存在する「読者」とのコミュニケーション空間にあることを示唆する上で、重要な役割を果たしたと言える。

しかしながら、ルジュンヌの自伝定義は、自伝に隣接・類似したジャンル(回想録、伝記、小説、自伝的詩作品、日記等)から自伝を厳密に区別しようとするあまりに、ほとんど根拠のない多くの基準を持ち出しており、その

硬直した静的な定義に批判が集まった。たとえば、自伝の文体は「散文」であり（韻文で自伝を書くことはできないのか?）、主として用いられる作中語り手の人称は一人称である（自分を三人称の「彼」や「彼女」として表象する自伝はありえないのか?）、という具合に、その定義自体がほぼ同時に自伝作品の他の可能性を示唆する矛盾に陥っている。こうした自伝定義の努力を、ド・マンは「脱力感に襲われるような不毛性」として一蹴している²⁹。

ド・マンは、「人生」が「自伝」を生み出す、という一般的仮定を反転させ、「自伝」を書くという企図が「人生」を生み出し、それを規定するのではないか、と言っている。というのも、著者が自伝において成し遂げるすべてのことは、「あらゆる点において彼の用いるメディアの可能性によって規定される」からである³⁰。これは、「自伝」が実際の「人生」との参照関係において生まれるのではなく、「自伝」もフィクションと同様にメディアを通じて生み出される構築物であることを示唆するものだ。フィクションとしての小説と、自伝としての小説は、区別のできない関係にある。「自伝は、従って、ひとつのジャンルやテキストの種類ではない。それは、ある程度すべてのテキストに見られる読みの比喻、ないし理解の型（Lese- oder Verstehensfigur）なのである。」³¹ ド・マンは、ルジュンヌとは違い、「自伝」を文学ジャンルとして定義することを事実上放棄するのだが、両者には読者の「読み」の問題を自伝ジャンルに結び付けている点で共通した問題認識があるとも言える。自伝の特徴を、テキスト自らが作り出した「顔」をふたたび「仮面」で覆う、一種の仮面遊戯として表現したド・マンの記述はミステリアスで魅惑的だが、自伝研究をより意味のあるものにするためには、読みのパターンを決定する操作・過程、歴史的・社会的背景への配慮が不可欠だろう。自伝を書く「著者の地位」を成立させる複合的要因についても、ド・マンの場合、十分に考慮されているとはいえない。

本論の最初の問いに戻ろう。ある小説が「自伝的」と言ったとき、批評家や研究者はそれで何を述べたことになるだろうか。たとえば、平凡な

例ではあるが、リルケの『マルテの手記』に登場する様々な空間が、リルケ自身も訪れた場所であること、ただその参照関係を指摘するために「自伝的」という言葉を用いるのは、「自伝的」という概念の持つ幅広さを極限まで縮小することになるだろう。というのも、「自伝的」という概念のこのような用法は、虚構と思われていたものが実は現実であった、という「仮面はがし」なのであるが、著者という人物をめぐる虚構と現実との境界が流動的であり、両者いずれもが虚構的空間に成立しているとすれば、仮面をはがす意味合いはほとんどなくなったと言える。また、同じ「自伝的」という概念は、女性文学研究においては非常に二律背反的な意味合いを持っている。女性の書き物の特徴は、しばしば「自伝的」だと言われてきたが、自伝研究において女性作家によるテキストは周辺的な地位に甘んじてきた。つまり、ここで言われる「自伝的」とは、芸術作品にまでは十分に昇華されていない「素朴で模倣的な」という否定的意味合いなのである³²。

「自伝的」という概念は、それが用いられる様々な文脈に応じて、テキスト分析、文化理解のための多様な方向性を示していると言えるだろう。本論では、特に「著者」の歴史的成立過程と、「著者像」を成り立たせているメカニズム、「読者」を中心とした文学的コミュニケーションの問題を示唆するにとどめているが、自伝研究理論は、扱われる個々の作家・テキストの数に応じてその多様性を増してゆくと思われる。

注

- 1 一人の作家・著作家に関して、本人の「自伝」だけでなく、他人による「伝記・評伝」が複数存在する例は多い。また、作家の「自伝」がすでに編著者の大量の「注釈」という伝記的テキストと共存している場合も稀ではない。作家をめぐる口頭による「うわさ」も含めて、一人の作家の「生」は競合する自伝・伝記テキストおよび（写真や映像などの他の）メディア情報によって形成されている。この問題を文学研究における編集・校閲との関連で論じたものとして以下の論文を参照のこと。
Ricklefs, Ulfert: Leben und Schrift. Autobiographische und biographische Diskurse.

- Ihre Intertextualität in Literatur und Literaturwissenschaft (Edition). In: Editio. Internationales Jahrbuch für Editionswissenschaft. Bd. 9. Tübingen: Niemeyer, 1995. S. 37–62.
- 2 Eagleton, Terry: Einführung in die Literaturtheorie. Stuttgart: Metzler, 1992. (2. Aufl.). S. 14.
- 3 Holdenried, Michaela: Autobiographie. Stuttgart: Reclam, 2000. Vgl. S. 37–51. (II–3. Entwicklungstendenzen und Strukturmerkmale moderner Autobiographik.)
- 4 Wagner-Engelhaaf, Martina: Autobiographie. Stuttgart; Weimar: Metzler, 2000. S. 10. (I.–2. Die Autobiographie und das Autobiographische. S. 5–10.)
- 5 Autor および Autorschaft に関する新たな議論は、以下の文献を参照のこと。Jannidis, Fotis u.a. (Hrsg.): Rückkehr des Autors. Zur Erneuerung eines umstrittenen Begriffs. Tübingen: Niemeyer, 1999.; Texte zur Theorie der Autorschaft. Hrsg. und kommentiert von Fotis Jannidis u.a. Stuttgart: Reclam, 2000.
- 6 Vgl. Niggel, Günter (Hrsg.): Die Autobiographie: zu Form und Geschichte einer literarischen Gattung. 2., um ein Nachw. zur Neuausg. und einen bibliogr. Nachtr. erg. Aufl.. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 1998.; sowie Misch, Georg: Geschichte der Autobiographie. Bd. 1–4. Frankfurt/M., 1907–1969.
- 7 Siehe Anm. 6.
- 8 Misch, Georg: Begriff und Ursprung der Autobiographie (1907/1949). In: Niggel: Die Autobiographie. S. 33–54. Hier S. 38.
- 9 Ebd. S. 40.
- 10 Ebd. S. 41.
- 11 Ebd.
- 12 Barthes, Roland: Der Tod des Autors. In: Texte zur Theorie der Autorschaft. (Anm. 4) S. 185–193. (Einleitung: S. 181–184.) Hier S. 186.
- 13 Foucault, Michel: Was ist ein Autor? In: Texte zur Theorie der Autorschaft. S. 198–229. (Einleitung: S. 194–197.) Hier S. 212.
- 14 Ebd. S. 212.
- 15 Holdenried: Autobiographie, S. 19.
- 16 Tomaševskij, Boris: Literatur und Biographie. In: Texte zur Theorie der Autorschaft. S. 49–61. (Einleitung S. 46–48.)
- 17 Ebd. S. 61.
- 18 Ebd. S. 50.
- 19 Ebd. S. 61.
- 20 Holdenried: Autobiographie, S. 55.
- 21 Vgl. Goodman, R. Katherine: Weibliche Autobiographien. In: Gnüg, Hiltrud; Möhrmann Renate (Hrsg.): Frauen Literatur Geschichte. Schreibende Frauen vom Mittelalter bis zur Gegenwart. 2., vollst. neu bearb. und erw. Aufl. Stuttgart: Metzler, 1999. S. 166–176.
- 22 近年発表された女性の自伝・自伝書法に関する研究書に次のようなものがある。

- Holdenried, Michaela (Hrsg.): Geschriebenes Leben. Autobiographik von Frauen. Berlin: Erich Schmidt, 1995; Heuser, Magdalene (Hrsg.): Autobiographien von Frauen. Beiträge zu ihrer Geschichte. Tübingen: Niemeyer, 1996.
- 23 Tomaševskij: Literatur und Biographie, S. 61.
- 24 Vgl. Foucault: Was ist ein Autor? S. 211-218.
- 25 Ebd. S. 214.
- 26 Ebd. S. 217.
- 27 Ebd. S. 215.
- 28 Lejeune, Philippe: Der autobiographische Pakt (1973/1975). In: Niggel (Hrsg.): Die Autobiographie. (Anm. 6) S. 214-257.
- 29 De Man, Paul: Autobiographie als Maskenspiel. In: derselbe, hrsg. von Christoph Menke: Die Ideologie des Ästhetischen. Frankfurt/M.: Suhrkamp, 1993. S. 131-146. Hier S. 132.
- 30 Ebd. S. 132 f.
- 31 Ebd. S. 134.
- 32 Vgl. Holdenried (Hrsg.): Geschriebenes Leben. S. 9.

(ひろさわ・えりこ 商学部助教授)